国際研究集会「見つめる能面　能面を見つめる」企画展示

特別展「仮面の芸能・人形の芸能」目録

期間　二〇一四年十一月二十五日～十二月二十六日
場所　古典芸能研究センター二階展示室

Ⅰ　人形の芸能

日本の「人形の芸能」としてまず想起されるのは、「人形浄瑠璃 文楽」であろう。語り物としての「浄瑠璃」と、西宮辺りを本拠地とした傀儡子（くぐつ）によって行われていた人形芸が結びついて誕生した人形浄瑠璃（操芝居・浄瑠璃操ともいう）は、京都そして江戸・大坂で展開した古浄瑠璃の時代を経て、大坂の太夫竹本義太夫（筑後掾）の義太夫節に到達する。以後、義太夫節による人形浄瑠璃は、大坂道頓堀の竹本座・豊竹座で隆盛を誇るが、近世の中期以後は次第に衰退していく。ただ、その折々に救世主が現れたことで、滅亡してしまうことはなく、ユネスコ無形文化遺産に登録された現代の「人形浄瑠璃 文楽」へと繋がる。

一方日本の各地には、民俗芸能としての様々な「人形の芸能」が残っている。近世に流行した人形浄瑠璃は、大坂・京都・江戸などの都市だけではなく、日本の各地へと伝播していく。日本の各地に民俗芸能として残る人形浄瑠璃の多くは、竹本義太夫による義太夫節成立以後に、各地に伝えられたものである。しかし、例えば石川県東二口に残る文弥人形浄瑠璃は、その祖を義太夫節より古い古浄瑠璃に帰することができるなど、古浄瑠璃時代の人形浄瑠璃の姿を、いささかなりとも残す「人形の芸能」も地方にはまだ残っている。また、いくつかの土地には、語り物である浄瑠璃と傀儡子の人形芸が結びつく以前の姿を彷彿とさせる、さらに古い形態の「人形の芸能」も残っている。

民俗芸能の研究者であった喜多慶治は、日本各地の様々な民俗芸能を撮影し、ノートに記録してきた。喜多のフィールドワークの範囲は日本中（北海道・沖縄を除く）を覆い、その興味とする民俗芸能の種類も多岐にわたる。その様は、当センターの喜多文庫民俗芸能資料データベースで一覧できる。しかし、その中でも特に喜多が興味を持ち、度々調査に赴いた芸能を幾つか挙げることができる。各地に残る「人形の芸能」も又、喜多が特に興味を持っていた分野であった。

今回の展示「仮面の芸能・人形の芸能」の「人形の芸能」の部は、喜多慶治が撮影した数多の民俗芸能の写真から、浄瑠璃と結びつく以前の「人形の芸能」を彷彿とさせる四つの民俗芸能を取り上げて展示する。いずれも現在も残っている民俗芸能であり、インターネットを使えばその詳細な様子は、カラーの写真や動画で見ることができる。しかし、敢えてこの展示では昭和三十年から四十年代のモノクロ写真から数点を選んで展示した。「人形の

芸能」そのものとあわせて、当時の風俗をも楽しんでいただければと考えている。

1、八幡古表神社（はちまんこひょうじんじゃ）と古要神社の傀儡子舞と神相撲

福岡県築上郡吉富町／大分県中津市大字伊藤田

撮影日　①・③・④…昭和四十二年八月六日
②…昭和三十六年八月六日
⑤…昭和四十一年十月十二日と昭和四十三年六月二十三日
⑥・⑦・⑧…昭和四十三年十月十二日

福岡県の八幡古表神社と大分県の古要神社でそれぞれ行われる人形戯。どちらの神社も宇佐神宮（宇佐神社）に関わりのある神社で、それぞれの人形戯は、宇佐神社の放生会の際に奉納されてきた。現在は、宇佐神社の放生会からは離れて、各神社の例祭で行われている。

喜多慶治は、八幡古表神社には昭和三十六年と四十二年に、古要神社には昭和四十一年四十三年平成二年に調査のため訪れている。特に古要神社は、実際に傀儡子舞が行われる時期ではない六月に訪れ、人形の写真を撮影している。

① 相撲人形と御舞人形（八幡古表神社）
相撲人形は片足が胴串の役割をしており、どちらの人形も手足は糸でうごく

1古表①-1

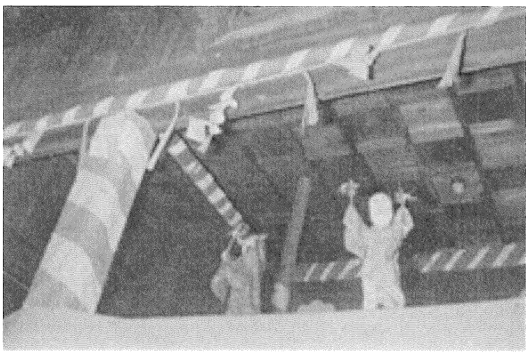
1古表①-2

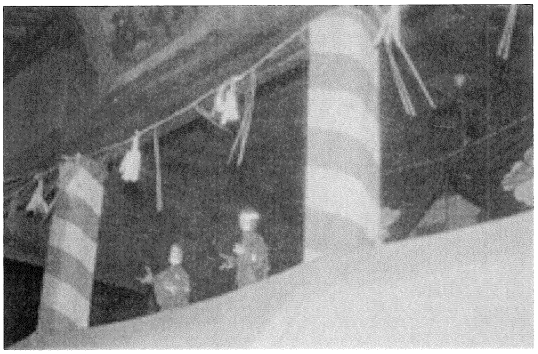
② 御舞人形による細男舞（八幡古表神社）

③ 御舞人形（礒良神）による舞（八幡古表神社）
白い布で顔を隠した人形が礒良神

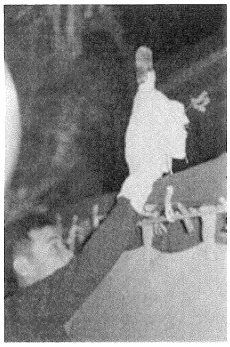
④ 神相撲の様を舞台裏から（八幡古表神社）

⑤ 御舞人形と相撲人形（古要神社）

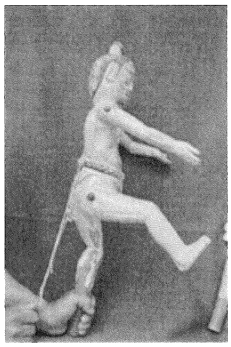

1古表②



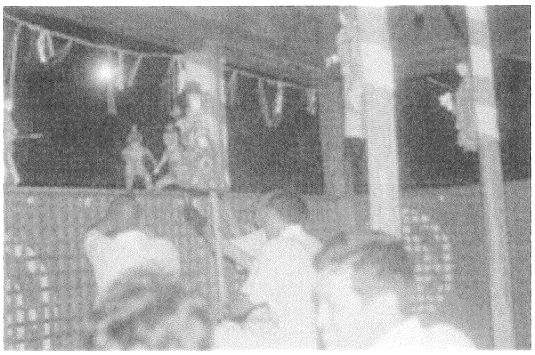
1古表③



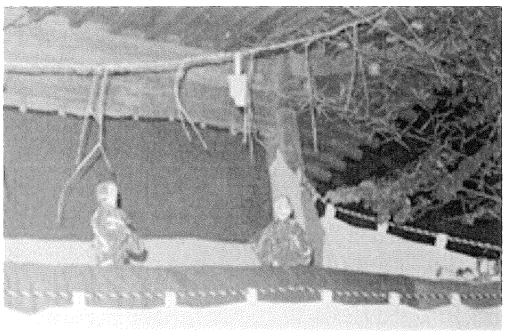
1古要⑤－1



1古要⑤－2



1古表④

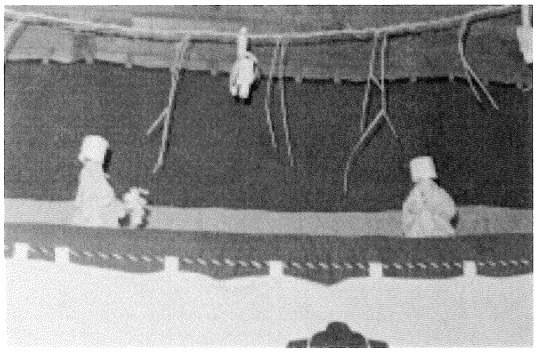


1古要⑥

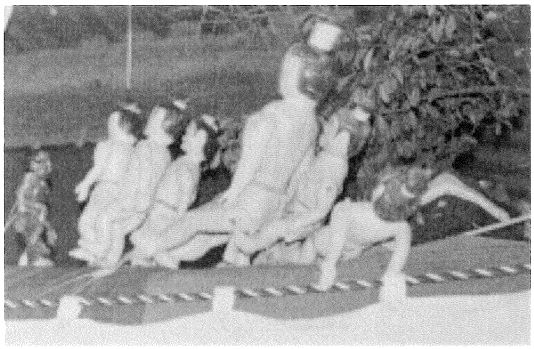
⑥ 御舞人形（小豆人形）の舞（古要神社）

⑦ 御舞人形（礒良神）の舞（古要神社）
白い布で顔を隠した人形が礒良神

⑧ 神相撲（古要神社）
小兵の神様一人と大柄な神様多数の対決で、必ず小兵の神様が勝つ



1古要⑦



1古要⑧

2、波々伯部神社のおやま行事

兵庫県篠山市宮ノ前

撮影日　①～⑧…昭和四十六年八月二日

波々伯部神社の例祭である祇園祭に奉納される人形戯。祇園

祭は毎年行われるが、人形戯は三年に一度行われる。喜多慶治は、昭和四十六年八月二日に現地に調査に行っている。ただし、この年は人形戯の行われる年ではなく、人形の虫干しのみが行われていた。展示しているとおり、喜多の撮影した写真には、人形に化粧をしたり、実際に人形を遣って見せたりしている場面を間近で撮ったものがある。これらは、喜多の依頼に保存会の人々が応えて、本番さながらの手順を見せてくれたことによるらしい。

① 波々伯部神社境内
倉庫から人形等の入った葛籠を取り出す

② 人形の点検と手入れ

２波々伯部①

２波々伯部②

③ 人形の点検　胴串を持って動かしてみる

④ 人形の構造
胴串と肘木が十字に交差している単純な作りである

２波々伯部③

２波々伯部④

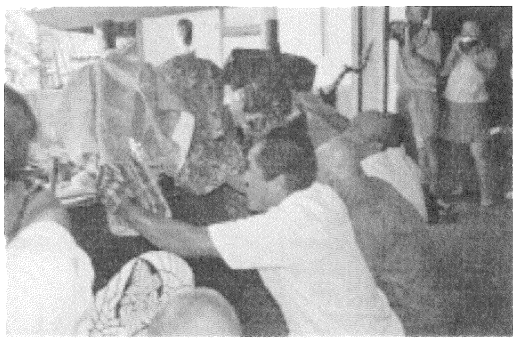
⑤ 人形以外の道具　龍の頭

⑥ 人形の顔に彩色をほどこす

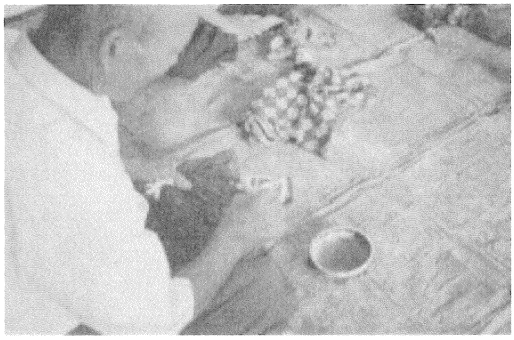
⑦ 人形を遣う様子　後ろから撮影

⑧ 舞台の様子　演目は「田原藤太」か

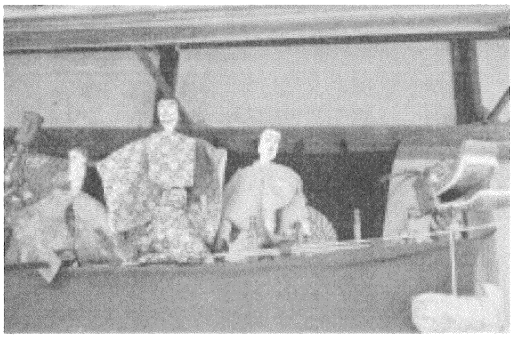
２波々伯部⑤



２波々伯部⑦



２波々伯部⑥



２波々伯部⑧

3、大矢田のひんここ

岐阜県美濃市大矢田　大矢田神社

撮影日　①～⑥…昭和三十九年十月十八日

大矢田神社の祭礼（四月第二土曜日の翌日の日曜日と十一月二十三日）に行われる人形戯。喜多慶治は、昭和三十九年十月十八日に調査に行き、写真と調査ノートを残している。ここで遣う人形は、祢宜殿・農人・猩々姫の三種類である。祢宜殿と農人の人形は、竹を十文字に結び竹籠に紙を貼り色を塗ったカシラと竹籠で胴を作り衣装を着せた素朴なもので、二メートルほどの心竹とカシラを前後に動かす竹で一人で操る。

①　御旅所横の小山の山腹にある舞場　下にあるのはだんじり

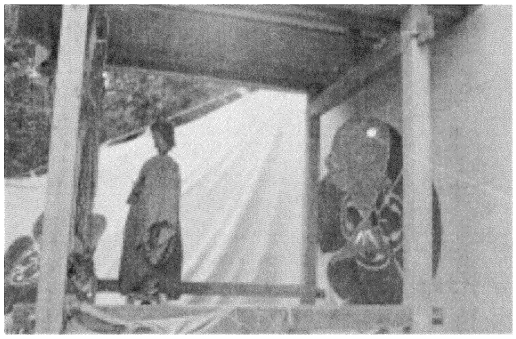
②　舞場の近くで待機する人形（農人）たち

③　仮屋置かれた猩々
　単純なからくり仕立てになっており、途中で鯛釣りの所作を見せる

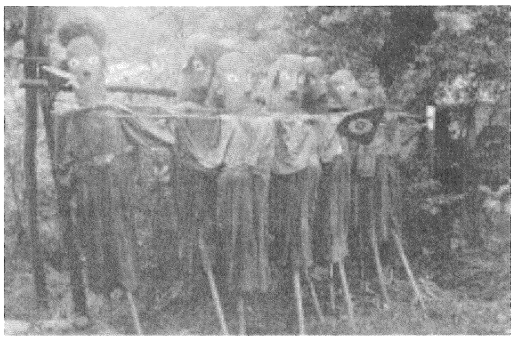
④　祢宜殿　大蛇の舞では須佐之男となる

⑤　祢宜殿を舞わす様子
　長い胴串を持って舞わす

３大矢田①



３大矢田③

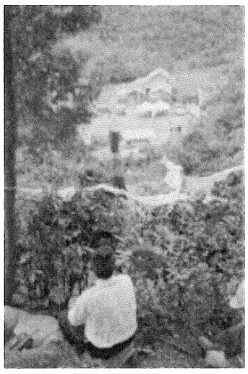


３大矢田②

３大矢田④

３大矢田⑤

⑥　山腹の舞場から御旅所を見下ろす



３大矢田⑥

4、天津司（てんづし）舞

山梨県甲府市小瀬町と下鍛冶屋町

撮影日　①～⑧…昭和四十年四月十一日

甲府市の天津司神社・諏訪神社で行われる人形戯。喜多慶治は、昭和四十年四月十一日と昭和五十三年四月九日十日の二度に渡り調査におもむいている。

胴串に頭と手を付けて衣装を着せた等身大の九体の人形（ささら（二）・笛・太鼓（二）・鼓・鹿島・姫・鬼）が、天津司神社から諏訪神社へと渡御し、諏訪神社で中世の田楽を彷彿とさせる舞を舞う。祭の次第は、文化元年の日付がある天津司神社所蔵文書に記されている内容と大差ないという。

①　御神体の人形
　びんさゝら（①－1）と太鼓（①－2）を持つ

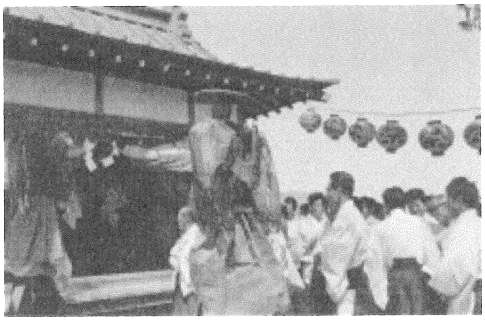
②　天津司神社を出発　道中、御神体は覆面をしている

③　御成道を通って諏訪神社へと渡御

④　御神体の人形　笛（④-1）と鼓（④-2）を持つ

⑤　諏訪神社境内のお舟と呼ばれる舞場で、人形を舞わす

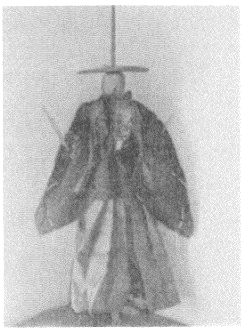
⑥　姫の舞



4天津司②

4天津司①-1

4天津司③



4天津司①-2

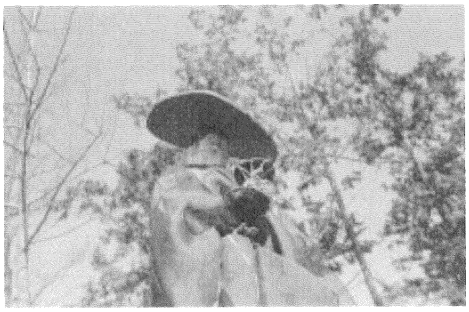
⑦　鬼の舞

⑧　天津司神社へ還御

4天津司⑤

4天津司④-1

4天津司⑥



4天津司②-2

4 天津司⑦

4 天津司⑧

（展示解説担当　川端咲子）

Ⅱ　仮面の芸能

「仮面の芸能」の部は、能楽（能・狂言）の面に関する資料を中心に展示する。

古来、仮面には呪術的な力があると考えられてきた。人は、仮面をつけることによって神や超現実的な存在に「変身」する。その認識は、舞楽や能においても同様だろう。

能では、大半の作品で、主役をつとめる演者（シテ）が面を用いる。一般的に面は、頭部全体を覆うものから顔のみを隠すものまで様々であるが、能の面は顔のみを隠すタイプに限られる。そのため、「かぶる」とは言わず、「かける」または「つける」と言う。面を使うのは、神仏や鬼神、亡霊などの現実の人間以外の役柄と、老人と女性の役が原則であり、老人以外の男性の役の場合は、盲人などの一部の役を除き面をつけない。（ただし、こうした役者の素顔も面の一種と見なして「直面（ひためん）」と呼び習わしている。）

現在、能の面は「おもて」と呼ばれ、基本型は約六十種、細かくは二百数十種を数える。約六十種の基本型は室町末期にはほぼ出そろったとされている。江戸期にかけて能面はより洗練・細分化され、さまざまな種類の面が作られるようになった。この頃、越前の出目家、近江の井関家といった世襲の面打家（目録2参照）が登場してくる。そのような中で能面の様式化も進んでいった。

狂言では、登場人物の多くが現世の人間であり、能に比べると面を使うことが少ない。狂言は当時の現代劇でその表現も現実的・写実的であり、素顔の役者の表情に負うことも大きかったのだろうか。面を用いるのはやはり神仏や霊などの超現実的な役と、人間では老人、老尼、醜女といった特殊な役柄に限られる。また、人を騙したり脅したりする道具として使われることもある。狂言面の造形は能面に比べると融通無碍で、ユーモラスな味わいの感じられるものが多い。今日用いられている基本的なものは二〇種ほどである。

展示は、まず能面に関する文献資料として、前述の面打の系譜と、能の「型付（かたつけ）」（各作品の具体的な演出資料）を紹介した。さらに、能・狂言面の描かれた絵画資料を各種展示した。これらの絵の中には、画者がわかっているものも含まれている（目録11の

円山応震、目録13の河鍋暁斎（目録14）や山口蓼洲（目録12）のように演者自らが絵筆を執った絵は、舞台の様子を彷彿とさせる。面がどのように描かれているかというだけではなく、こうした描き手の個性なども含めてお楽しみいただければ幸いである。

（大山範子）

1 〔江戸城謡初之図〕 写 掛軸 一幅 江戸後期

謡初とは、将軍と諸大名らが新年をことほぐ江戸幕府恒例の年頭行事であり、毎年正月三日（承応三年〔一六五四〕までは正月二日）に江戸城本丸の大広間で行われた。

熨斗目長袴の諸大名が大広間に揃うと、酉の刻（午後六時頃）に将軍が大広間中段に着座し、新年をことほぐ献酬の儀式が執り行われた。儀式の間、まず観世大夫が平伏のまま「四海波」を謡い、続けて観世大夫による「老松」、輪番の大夫（宝生・金春・金剛のいずれか）による「東北」、喜多大夫による「高砂」の順に居囃子が奏せられた。次に、三人の大夫に時服が下賜されると、大夫らは時服を壺折に着けて「弓矢立合」を相舞で舞った。これらが演じられた場所は、大広間南側の板敷きの廊下である。

絵図上方では、諸大名が献上した盃台が運ばれている様子が描かれているとみられ、絵図下方の南側の廊下では、素袍・侍烏子の姿の囃子方が、すでに役者らが控えている所定の位置に向かっている。

神戸女子大学図書館蔵

2 仮面譜 刊 半紙本 一冊 喜多古能筆

寛政九年（一七九七）六月（序）

歴代の面打ち名人とその系譜等を記した書。名人については、伝説的作者の「神作」、世阿弥の伝書にみえる作者十名「十作」、室町末期までの名人六名「六作」ほか、「古作」・「中作」・「中作以後」と時代別に名をあげる。続いて「井関家」・「出目家」などの系譜、活躍時期など記す。能面史及び能面鑑定に関する基本的資料。

喜多七大夫古能（一七四二～一八二九）は江戸後期の能役者、シテ方喜多流の九代家元。喜多流中興の祖と云われる。号、似山、健忘斎。能の故実にも明るく研究熱心で、『悪魔払』、『寿福抄』など著作も多い。能面についても本書のほかに『面目利書』を著した。

伊藤正義文庫蔵

3 能覚書 写 横本 二冊 塩小路光貫筆

安永六年（一七七七）五月

能の型付。本冊には百四十八番と「書上之外」三十五番の型付（装束付も含む、以下同じ）を、別冊には十四番と「片山ニテ習ヒタル」六番の型付、「観世融十三段之舞唱歌」を詳細に記す。「凡例」には、舞台でのさまざまな動きを記すために独特な符号が示され、「オモテツカフ」「オモテフセル」と、面に関する符号が含まれているのが注目される。

塩小路光貫（一七三九～一八〇〇）は九条家の諸大夫、号稲音、明和三年若狭守。観世十五代大夫元章、および片山幽室の弟子。本書の他にも、自筆伝書が現存する。

神戸女子大学図書館蔵

4 **〔能面図巻〕** 写　巻子本　一巻　孝頂

慶応二年（一八六六）

能面二十五点の絵を、およそ尉面→女面→男面→異相面の順に描いた絵巻。面ごとに彩色に関する注記が書き込まれている。筆者の孝頂については未詳。なお、奥書には「慶応二年寅仲春　面数廿八　孝頂写」とあるが、冒頭が欠損しているため三点分の絵がない。

伊藤正義文庫蔵

5 **能狂言画帖** 写　折本　一冊　江戸中期

見開きで右側に能、左側に狂言という体裁の画帖。展示部分は能「頼政」と狂言「丼礑」。「頼政」は後場で、シテの面「頼政」は本曲だけに用いる専用面である。

所収曲は「高砂・すえひろかり・たむら・きんし聟・うねめ・ふあく・せいおうほ・惣八・らしやうもん・ちとり・玉の井・文にない・よりまさ・〔どぶかつちり〕・しやり・ちきりき・あたか・すはちかみ・かすか龍神・かまはら」の全二十曲。

神戸女子大学図書館蔵

6 **能画** 写　一枚物　四枚　江戸中期

「錦木」「采女」「松風」「楊貴妃」。四曲とも若い女性の面（小面・若女・増などの類）を用いる作品。「錦木」は前場で、美しい彩りで飾った「錦木」を持つ男（直面）と「陸奥の狭布の細布」を腕にかけた女の図。二人によって、当地の名物である錦木と細布のことが語られる。「采女」は前場、春日社に参詣した旅僧と木の葉を持った一人の女の図。女は神前に木を植えようとしており、僧にその謂われを語る。「松風」は前半部の松風と旅僧。潮汲み車を引きながら松風と村雨が自分たちの塩屋に帰ってくる場面。二人一緒に描かれないのは珍しい。「楊貴妃」は、玄宗皇帝の命で常世国を訪れた方士（神仙の術を行う者）に、楊貴妃が形見の品を渡す場面。詞章では「玉の釵」だが、舞台では天冠（もしくは鳳凰の飾り物のみ）を渡す。

個人蔵

7 **能狂言絵巻** 写　巻子本　一巻　江戸前期

各図に、謡や台詞の一節が書き添えられている。所収曲「式三番・難波・すゑひろかり・八島・せんし物・はせを・かき山ふし・紅葉狩・あはたくち・あま・八句れんか・白髭・はき大名・朝長・志水・野のみや・花こ・張良・くわいちうむこ・三輪・鳥盗人・白楽天・ゑほしおり・敦盛・たうすまひ・松風・うつほさる・羅生門・くれは」。

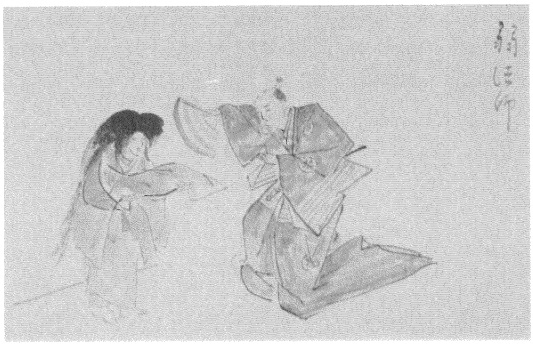
神戸女子大学図書館蔵

8 **〔能狂言画帖〕** 写　折本　一冊

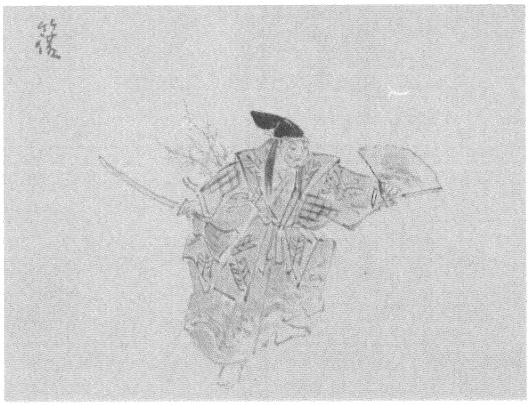
明治四十一年（一九〇八）

能と狂言を交互に描いた画帖。全二十九曲。所収曲は、三番叟・老松・靱猿・船弁慶・仏師・道成寺・秀句傘・松風・鎌腹・安宅・空腕・俊寛・武悪・望月・米市・弱法師・伯母ヶ酒・箙・貴聟。

能「弱法師」は、盲目の乞食弱法師（実は俊徳丸）が生き別れた父に再会するという内容。能面の「弱法師」は、シテ俊徳丸の専用面で、盲目を表している。狂言「伯母ケ酒」は、男が伯母の家を訪ね酒を乞うが断られ、鬼に化けて酒を飲むが酔いつぶれてしまうという内容。男は「武悪」の面を用いて鬼に化ける。能「箙」は、梶原景季が旅僧に名木箙の梅のいわれと一の谷合戦の様子を語るという内容。後シテの梶原景季は、若武者姿で腰に梅花の枝を挿し、「平太（へいだ）」の面をつけている。「平太」は精悍な武者の風貌を表す。　吉田文庫蔵



「弱法師」



「箙」

9　舞楽秘曲大成　刊　半紙本　六巻三冊

正徳五年（一七一五）　京都谷口七左衛門刊

江戸時代中期に刊行された能楽の解説書。能・狂言面、装束、造り物の絵図とともに二百曲分の能の装束付を載せる。

伊藤正義文庫蔵

10　狸腹鼓　写　一枚　玉手菊洲画　大正二年（一九一三）

狂言「狸腹鼓」は、尼に化けた狸が猟師に殺生をやめさせようとするが、正体を暴かれ腹鼓をして命乞いをするという内容。ただし、この絵には薄をさした垣の造り物が描かれていることから、大蔵流ではなく和泉流、もしくは大蔵流の分家大蔵八右衛門派「射狸（いだぬき）」の可能性がある。玉手菊洲は明治期の能画家。「九々翁　菊洲」とあることから、菊洲が八十一歳の年に描かれたもの。シテの狸がつけているのは、「狸腹鼓」の専用面「狸」。愛嬌のある造形の面が多い。　伊藤正義文庫蔵

11　〔能楽図〕　写　巻子本　一巻　円山応震画

「翁」

巻頭に橋掛りが描かれ、「翁／千歳三番叟」「高砂」「末広」「田村」「千鳥」「野宮」「花子」「小鍛冶」「福神」の曲名が番組風に掲出され、以下上記に「融」を加えた能五番・狂言四番（翁・田村・千鳥・花子・末広・高砂・野宮・融・小鍛冶・福神）が描かれている。

円山応震（一七九〇～一八三八）は江戸後期の画家。京都出身。円山応挙次男の木下応受の子で、木下応夏は実弟。

字は仲恭、別号に百里・星聚館・方壷子。応挙長男の応瑞の養子となって円山派を継ぎ、円山家三世となる。文化～天保期に円山派棟梁として活躍。同派の画風を忠実に守り、人物、山水、花鳥に巧みだった。人物を描いた作品は多いが、能の絵は知られていない。

古典芸能研究センター蔵

12 〔山口蓼洲狂言版画〕 刊 一枚物 六枚 山口蓼洲画

何枚揃いのものであったか未詳。展示したのは「大黒連歌」「石神」「靱猿」「福の神」「腰祈」「二九十八」の六枚。同画家の『狂言百番』（後掲）の絵と比べると、同書ではシテと中心になる人物のみを描くのに対し、本作は、舞台の様子を絵の大きさの枠で切り取ったように描く（構図には異同あり）。ちょうどカメラのファインダーをのぞいて写真を撮る時のような感じであり、いわゆる能狂言絵としては珍しい、近代的な要素だといえる。

山口蓼洲（一八八七～一九六六）は、狂言師・日本画家。京都生。本名は古沢慶三。大蔵流狂言師の家系に生まれ、のち、本願寺に狂言方としてつかえた山口家の養子となる。狂言は十世茂山千五郎、十一世千五郎に師事。また谷口香嶠に絵を学び、能画、狂言画を得意とした。著作に、『狂言百番』（艸芸堂、一九二二～一九二三）、『能具大観』（芸艸堂、一九二四）、『狂言画大觀』（板画会、一九二八）など。

個人蔵

13 能画図式 刊 半紙本 一冊 河鍋暁斎画

明治二十年（一八八七） 東京吉田金兵衛刊

慶応三年（一八六七）刊の河鍋暁斎筆『能画図式』から、狂言絵のみを抄出して明治二十年（一八八七）に再刊された画集。幕末・明治期の日本画家として名高い暁斎は、大蔵八右衛門派の狂言を本格的に稽古し、たびたび狂言を題材とした絵を描いた。

「蛸」

「八尾」

展示の「蛸」は、蛸の幽霊が旅僧に自分の供養を頼む様子が描かれており、蛸の幽霊はユーモラスな「嘯吹（うそふき）」の面をつけている。「八尾」は、「嘯吹」の面をつけた罪人が、恐ろしい「武悪」の面をつけた閻魔大王に、昔閻魔の稚児だった地蔵からの手紙を見せる様子が描かれている。「嘯吹」の嘯を吹くとは口笛を吹くことで、ヒョットコのようにすぼめて突き出した口が特徴の面である。動植物の精や人間の亡者などに使用される。「武悪」は、狂言で用いられる代表的な鬼面。

伊藤正義文庫

14

〔福王雪岑画「能画」〕 写　巻子本　一巻　福王雪岑画

所収曲「千歳、白楽天、鼻取すまふ、俊成忠則、くさひら、松風、歌仙、道成寺　金春流、ゑさし十王、冨士太鼓、花子、羅生門、こんふうり、三輪、宗八、烏帽子折、絃上、呉服」を記す。末尾に「雪岑筆（印）」。冒頭は「翁」の上演の様子だが、主役の翁（白色尉）ではなく、露払い役の千歳を描く。

「千歳」

福王雪岑（?～一七八五）は、江戸中・後期の能役者。観世流ワキ方福王流の家元、九世茂右衛門盛勝。号、白鳳軒。はじめ英一蝶に学び、後は土佐風を慕ったという。もっぱら能・狂言絵を描き、綿密な彩色画が多く残る。

伊藤正義文庫蔵

15

〔能楽図巻〕 写　巻子本　一巻　江戸後期

翁舞と鈴ノ段が異時同図で描かれている。所収曲は「翁（三番叟を含む）・加茂・かつこ太鼓・頼政・比丘さた・源氏供養・いくゐ・道成寺・清水・龍田・猿買座頭・竹生嶋・文相撲・班女・きつね塚・羅生門・悪太郎・藤渡・たけのこ・白楽天・柏崎・みかつき・自然居士・末廣・朝長・鳥盗・酢はちかみ・鵜飼・高砂」の二十九曲。「柏崎」の料紙と「末広」の料紙に錯簡があるか。狂言に比較的珍しい曲が見られる。展示部分は、冒頭二曲「翁（三番叟を含む）」と「加茂」。神戸女子大学図書館蔵

16

〔舞楽図巻〕 写　巻子本　四巻　□田益宣

元文六年（一七四一）

江戸時代中期の舞楽の絵巻。全五十二曲。奥書に「元文六年酉正月十八日　□田益宣写之」とある。筆者の□田益宣については未詳。

舞楽面は能面よりも大きく、非写実的で象徴的な造形が多い。「還城楽（げんじょうらく）」とは「見蛇楽（げんだらく）」が転じた曲名ともされ、西域の人が蛇を見つけ、それを捕らえ喜ぶ様子を舞にしたといわれる。朱色の恐ろしい面をつける。「胡徳楽（ことくらく）」は六人の舞人が酔ったしぐさを見せる滑稽な舞。亭主役の二人は雑面（ぞうめん）と老人の面をつけ、客の四人は赤い面をつけ酔った様子を表す。雑面とは、長方形の和紙に白絹を張り、耳、目、鼻、口を抽象的に描いた面で、現在は、「胡徳楽」の他、「蘇利古（そりこ）」や「安摩（あま）」でも使用する。「羅陵王（らりょう）」は、中国、北斉の蘭陵の王が戦の勝利を寿いで舞った舞とされる。知勇に優れた王は美しい顔を隠すため、上部に

竜の彫刻をのせた金色の面をつけている。「納蘇利」は、雌雄の竜が遊びたわむれる様子を表した二人舞で、「羅陵王」の番舞。紺色または緑色の竜面をつけた姿で舞う。

「安摩」は、他の舞楽にはない特色を持つ二人舞で、舞人は手に笏を持ち、雑面をつける。「二ノ舞」は「安摩」の番舞で、「安摩」に続けて舞われる滑稽な舞。老爺は大きく笑った咲面、老婆は大きく腫れた腫面をつける。「胡飲酒」は、中国北方の胡国の人が酔って舞う姿を舞にしたといわれ、舞人は長い毛のある茶色の面をつける。「抜頭」は、猛獣に父を殺された胡人の子が、父の仇を討ち歓喜する様子を表したとされる舞。舞人は、天狗のような赤い面をつけ、頭巾様の牟子を被る。「崑崙八仙（八仙とも）」は、古代中国の伝説上の山、崑崙山にいたとされる八人の仙人が、鶴となって舞う姿をあらわしたという。羽を広げたような扇形の甲を被り、くちばしの先端に小さな鈴を吊るした面をつける。　古典芸能研究センター蔵

（展示解説担当　大山範子2・3・5・6・7・11・12・14・15／長田あかね1・4・8・9・10・13・16）